

「水尾點」を巡つて

築 島 裕

點圖集に収録されてゐる點圖の一つに「水尾點」なるヲコト點がある。このヲコト點を實際に加點した訓點本は、未だ一點も發見されてゐないのであるが、このヲコト點については、既に幾つかの論考が公にされてをり、小見を開陳したこともあるが、その後、聊か考へたこともあるので、何れも單なる臆測の域を出ないものであるが、敢へて愚見を述べて、大方の高批を仰がうとするものである。

一

「水尾點」について、それが點圖集に収められてゐることを、初めて述べられたのは、吉澤義則博士である。博士は、諸點譜に見えた點圖を列記して、その釋氏點の中に「五、水尾點」を挙げられた。⁽¹⁾その後、中田祝夫博士は、平安時代の訓點資料を探求し、それを歴史的に位置づけつつ論ぜられたが、その中で「水尾點」を取り上げ、未だ實際に加點された文献は發見されないが、これを「第一群點」のヲコト點の一種に分類された。そして、點圖集に「水尾點 圓堂僧正用之」とあることを取上げ、「圓堂僧正」は成典(九五八—一〇四四)であるが、成典は仁和寺圓堂に住んだ人で、その加點本は現存しないが、當時仁和寺では圓堂點が使はれてゐたから、成典はこのヲコト點を使用しなかつたであらうとし、更に又、禅掄本點圖に「丹州水尾禪門寺玄靜點」云々とある記事につき、その根據は薄弱であり、玄靜(九〇四存)

の加點は現存しないが、天台宗の法脈を承けてをり、水尾點と同じ第一群點の西墓點や仁都波迦點が天台宗で使用されてゐたから、玄靜が水尾點を使用した可能性は絶無ではないと考へられた。⁽²⁾更に中田博士は、水尾點の星點に「音」「訓」「コト」があることに注目し、これらが『成実論天長點』や『飯室切古點』（共に第一群點）と共通することを指摘された。⁽³⁾

次いで、曾田文雄氏は、圓堂點の第二壺から第五壺までの線點の符號の讀み方を左下隅から右廻りに連続して讀むと、カミナツキシクレフ ルメリウネヒヤマチ ヨヘムコトモエソイ タラセヌイ（平）ケサスホ

となり、「神無月時雨降るめり畝傍山、千代經むこともえぞ到らせぬ、みけさすほ」と讀まれ、寛平御時后宮歌合の「神無月時雨降るめり左保山のまさきのかづら色まさりゆく」と似てをり、この歌合の歌が、圓堂點成立の時期と極めて近いことを述べ、更に、延應本點圖の水尾點では、「カミナツキ」云々の符號が圓堂點と殆ど一致することを指摘し、中田説を援用して、圓堂點は水尾點からそっくり借用したものと推定された。⁽⁴⁾

これらの先学の説を承けて、筆者は、水尾點について、若干の卑見を述べた。その要點は、次の如くである。

一、延應本點圖の寫本を見ると、左上隅の星點が虫損のため欠損してをり、右上點の星點が「コ」となつてゐるが、星點に「コ」があるのは他に例がない。或いは「ヲ」の誤寫かも知れない。

二、星點の壺の内部に、中央「ノ」の一つの點しか無い。天台宗系のヲコト點には、多くの場合、壺の内部に多くの星點を持つのが例である。

三、左中に「トキ」があるが、星點に「トキ」を持つのは、圓堂點、古紀傳點など、第五群點には例があるが、第一群點には、その例が無い。

四、線點「一」「丨」「／」「∟」「リ」「ㄣ」「レ」「フ」「人」「ス」などの符號が、整然と九箇づつ配列されてゐる。尤も、符號の順序とその讀み方は、圓堂點とは若干異なつてゐるが。

五、曾田文雄氏の説の如く、線點「一」「一」「一」の順序と、その訓法が圓堂點と全く同じである。

以上のやうな觀點から、右上隅の星點を「二」の誤とし、左上隅の星點を「ヲ」の誤とすると、四隅の星點が「テ」「ニ」「ヲ」「ハ」となるから、第五群點の一種になるのではないかとの臆説を提案した。⁽⁵⁾

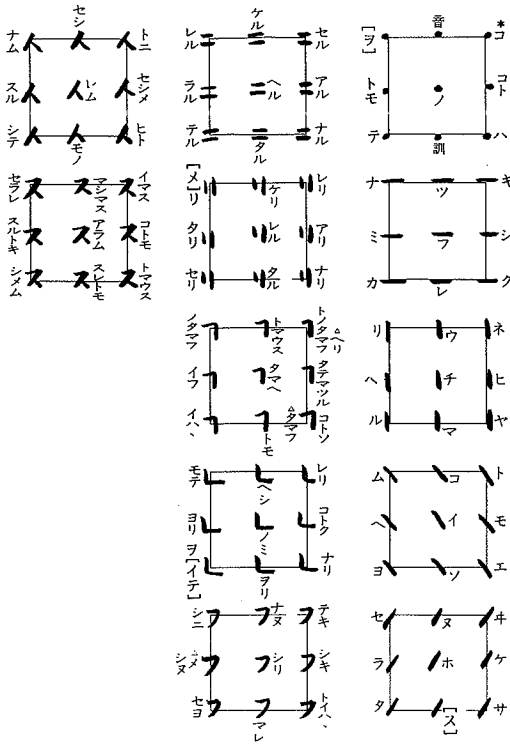
その後、更に考へるに、右上隅の星點を「二」の誤とし、左上隅の星點「コ」を「ヲ」の誤としたが、右上の星點が點圖集の諸本に多く「ヲ」とあることから、尚、慎重に考慮すべきであること、「カミナツキ」云々の線點を共通に持つヲコト點が、寛弘の頃に圓堂點、水尾點とは別に、更に、存在したこと、圓堂點の初期、十世紀末から十一世紀初にかけての頃の圓堂點は、後世の點圖集に掲載された圓堂點とは部分的に相違してゐたらしいこと、などを考へ合せると、水尾點の第一の壺は、やはり中田説の第一群點の可能性も否定できないこと、そして、かやうな構造を持つヲコト點は、十世紀の初頭のものであつて、圓堂點も未だ完全に安定してゐない、初期の頃のものだと推測することも可能ではないかと考へるに至つた。

二

水尾點を収録した點圖集の寫本は多数あるが、その中で最も古いのは、大東急記念文庫藏本の『點圖』一帖であらう。この本は「延應元年（二二三九）歲次己亥十月下旬比／以金剛王院之御本／模之矣／政阿之本也／傳領顯空」「永正十年（二五二三）少春中甸之比／自五智院被与脱之畢／求法沙門嚴助」の奥書を持つ、室町時代の書寫本で、「延應本」の名で知られてをり、夙に中田祝夫博士によつて翻刻され、昭和三十年に膳寫印刷によつて公刊されてゐる。「東大寺點」に始まる二十六種のヲコト點を収録してゐる。金剛王院は、聖賢（一〇八三—一四七）の開創で、真言宗小野流に屬する寺院であり、聖賢は金剛王流の祖となつた（金剛王院列祖門跡次第、血脈類聚記第四、傳法灌頂師資相承血脈）。この寺は醍醐寺の流であり、醍醐寺ではヲコト點は主として東大寺點を使用したから、巻頭に東大寺點を配したのであらう。

この本の九番目(十二丁表)に「水尾點 圓堂僧正用之」として、第一圖のやうな十二壺の點圖が見える。その内容は、星點に續き、圓堂點と同じ線點「二」「一」「 \setminus 」「 \surd 」の四壺があり、その訓法は上述の通り圓堂點と同一である。續いて、「三」「リ」「 \cap 」「 \cup 」「フ」「ス」「ス」の七壺があり、各壺毎に符號が整然と九箇づつ配列されてゐる。但し、この部分についての符號の讀み方は、圓堂點とは異なつてゐる。

〔第一圖〕延應本所載「水尾點」〔 \cap 〕内は蟲損等のため補讀。*「コ」は「二」の誤なるべし。



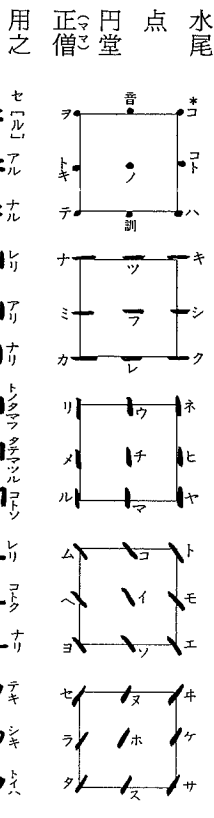
仁和寺藏本『諸點圖』(塔十九箇五十一號)一冊は、寛永十年(二六三三)書寫本で、「東大寺(點)」「喜多院點」以下「妙法院」に至る二十種のヲコト點の名稱を掲げるが、内容は「心覺アサリ點(圓堂點)」「俗點(經傳)」「水尾點 圓堂僧正

用之」「禪林寺點」「遍照寺點」「香隆寺點」「淨光房點」「池上阿闍梨點」「池上律師(淨光房點)」「(乙點圖)」「(甲點圖)」「(天仁波流點)」「(俗點(古紀傳點))」を列擧し、次に「右之諸點圖高山寺密經藏東第十六箱寫之了目錄之内所用分耳/作(僧?)顯證/寛永十年九月廿三日」なる識語があつて、その後「唯識論之點(喜多院點)」「通點(中院僧正點)」を記して終つてをり、目錄の順序とは一致しない。識語に「目錄之内所用分耳」とあるのは、もとの高山寺藏本の中から、必要ものを適宜抄出したとの意と見られる。もとの本は、高山寺方便智院目錄の東第十六箱に「諸點圖一帖」とあるものの寫しであらうが、遺憾ながら高山寺の經藏にはこの本は現存しない。⁽⁶⁾本書の水尾點を第二圖に掲げる。尚、本書を轉寫したものは多數現存するが、その中で石山寺藏本「諸點圖」一冊(深密藏第四四函五號)は整備された良い寫本である。

ところで、この顯證本についての問題は、「圓堂點」「俗點」に続いて、第三番目に「水尾點」が位置してゐることである。書寫者の顯證(一五九七一―一六七八)は、仁和寺、高山寺にあつて教學を修め、仁和寺の興隆に盡力し、多くの典籍を書寫、修理した名僧である。その最も身近にあつたヲコト點は仁和寺を中心に傳來した圓堂點(心覺アサリ點)であつたから、それを先づ卷頭に記載したものかと考へられる。例へば、仁和寺藏本『大毗盧遮那經疏』二十帖(御第七七幽)には、觀音院僧都寬意(一〇五四―一〇一)の説を受けた、寛治七年から嘉保二年(一〇九三―一〇九五)の訓點があり、ヲコト點に圓堂點を使用してゐるが、その中に、顯證は更に墨點を加へてをり、卷第二十の奥に識語を書き加へてゐる。恐らく寛治嘉保の圓堂點を解讀したのであらう。又、その次に「俗點(經傳)」、次いで「水尾點」「禪林寺點」「遍照寺點」「香隆寺點」と續くのは、高山寺本の順序と同一であり、それに従つたのであらうが、これが顯證にとつて、本當に「所用分」であつたのかどうか。「俗點(經傳)」は當時も漢籍に多く使用された清原など明經家の點であり、顯證の眼に觸れる機會もあつた可能性はあるから、⁽⁷⁾水尾點を第二番目に置いたことも、一往は肯定出来る。しかしそれ以後の諸點は、何れも古來使用された例の少ないものであり、これらを「所用分」とした理由が、今一つ明でない。或いは「水尾點 圓堂僧正用之」とあることから、真言宗を主としてゐた高山寺方便智院の僧が自己の宗派のものとして必要と感じ

て此處に序したのを、同じ流派の顯證がそれを繼承したのかも知れない。又、「禪林寺點」「遍照寺點」「香隆寺點」などは、何れも仁和寺の院家の名を冠したヲコト點であるから、参考になるかも知れないと考へて、その次に抄出したのかも知れない。

【第二圖】顯證本所載「水尾點」*「コ」は「ニ」の誤なるべし。

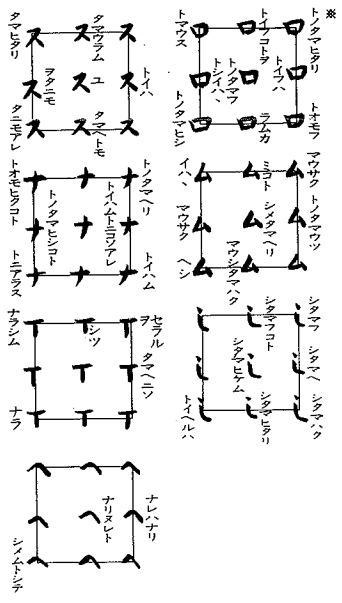


顯證本では、第二圖のやうに、「水尾點」と頭書して十二壺を掲げてゐるが、延應本では、星點の左中央が「トモ」となつてゐるのは顯證本によつて「トキ」と正すべく、延應本の左上隅の欠損部分が「ヲ」の終畫かと思われる「ノ」の先端らしき字畫が見えるのは、顯證本によつて「ヲ」と訂正すべく、又、第三壺の左中央を延應本で「へ」とするのは、

顯證本により「メ」とすべきであらう。唯、右上點の星點が兩本とも「コ」となつてゐるが、前述の通り、星點に「コ」を用ゐた例は他に全く見られないから、やはりこれは「ニ」の誤寫と認めざるを得ないであらう。斯くして、水尾點の四隅の星點は、中田説の通り「テヲニハ」となり、第一群點に屬せしめるのを妥當とするやうである。

「水尾點」を記載した點圖集はこの他にも多數存在するが、多くは上の二本の傳寫本であり、誤寫などが多いものである。尚、東大寺圖書館藏本「星點」など、正平七年（一三五二）の奥書を持つ本には、上述十二壺の後に更に「ロ」「ム」「シ」「ス」「ナ」「ト」「ハ」の七つの壺を記す（第三圖）が、多分後人の追加かと思はれる。

〔第三圖〕正平本所載「水尾點」追加部分（末尾七壺）



又、禅瑜本は、もとは延應本に依りながら、大幅に改編したものと認められ、他の諸本と異なつて、このヲコト點の創始者を記載してゐることは、上述の通り、既に吉澤義則、中田祝夫兩博士の言及されたところであるが、禅瑜本の寫本は、高山寺藏本（第一五五函三六號）、石山寺藏本などでも、同様の内容で、ヲコト點の創始者についての記述がある。参考までに高山寺本の記述を紹介しておく（「」内は石山寺本）。尚、禅瑜（一七六八存—一七七七存）は、江戸時代明和

「水尾點」を巡つて

安永の頃、仁和寺に在つた学僧である。

水尾點

以上丹州水尾禪門寺玄靜點「点」圓「円」堂僧正成典仁海付法資用之云々、彼玄靜從宗叡僧正受学金剛界法—

隨禪念宗叡付法入唐人也稟承胎「台」藏大法又事五大院安然闍梨重受兩「両」部大法更就最円闍梨承蘇悉地大

法—(石山寺本には返點なし)

因に、日比谷圖書館藏本『倭國諸家集點』(文永十年奥書本)の目次には「第十 水尾一點」とあり、その右傍に朱書で

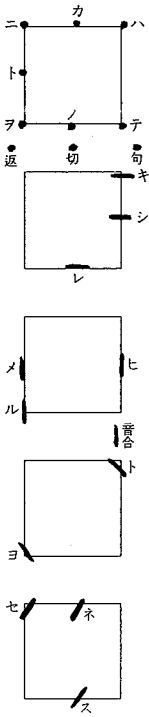
「——玄靜(靜に濁點を付す)師」とあるが、他のヲコト點の注記と同様に、多分禪瑜本の記事を抄出したものであらう。

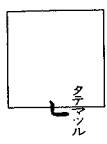
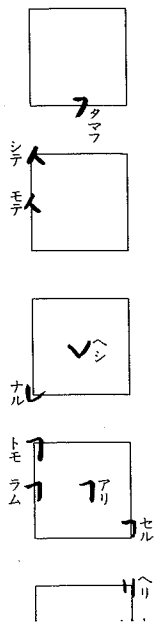
三

東寺觀智院藏本の『不動尊儀軌』(特一七箱第4號「1」)の寛弘九年(一〇二二)の朱點は、第一壺は喜多院點で、第二壺以下は圓堂點、水尾點と同一の「カミナツキ」云々の壺が続いてゐるものと認められる(第四圖)。この本には、次のやうな奥書がある。

(朱書奥書)「寛弘九年三月一日書了」

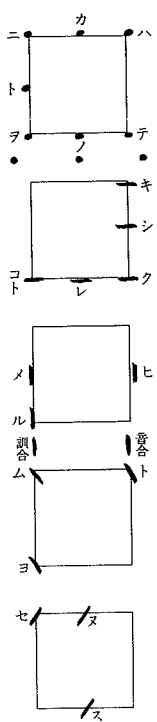
〔第四圖〕東寺觀智院藏本『不動尊儀軌』寛弘九年點 所用ヲコト點圖



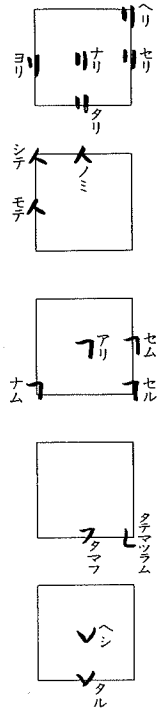


同じく東寺観智院藏本の『甘露軍荼利明王念誦法』(特一七箱第4號「7」)は、奥書は無いが、右の本と全く同筆で、同じ朱書の訓點が加點されてゐるが、これも全く同一のヲコト點である(第四圖)。かやうな例があるのは、寛弘の頃に、既に「カミナツキ」云々の符號が固定した形を持つてゐたことを示すものであり、水尾點の成立の時期も、この頃まで遡る可能性を持つと見ることが出来る。圓堂點の成立を十世紀末頃と推定するならば、「カミナツキ」云々の符號の成立は、更なる頃まで遡及し得ると言へよう。

〔第五圖〕東寺観智院藏本『甘露軍荼利明王念誦法』寛弘九年頃點 所用ヲコト點圖



水尾點を巡つて

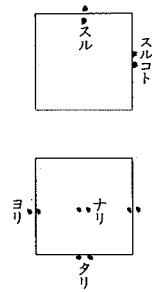


寛平法皇に灌頂を奉授した大僧正益信(八二七—九〇六)は、初め明詮僧都に従つて法相宗を學び、後、真言を宗叡僧正に受けたと傳へられ、當時、仁和寺には法相宗の要素もあつたらしく、高野山學園藏本『蘇悉地羯羅經』のやうに、治安三年(一〇三三)の喜多院點の後に承保元年(一〇七四)の仁和寺寛智の圓堂點を加點した例もあり、仁和寺で法相宗所用の喜多院點を使用した可能性もあつて、星點だけは喜多院點のものを使い、線點は當時仁和寺に行はれてゐた「カミナツキ」云々の符號を使用したのかも知れない。このやうに星點と線點とを、別種のヲコト點を合糅して使用した事例としては、少し時期が下るが、星點に池上阿闍梨點、線點に寶幢院點を使用したヲコト點がある。東寺觀智院藏本『觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門』(二三箱三號) 永保三年(一〇八三) 覺範點、同藏本『持世陀羅尼別行功德法』(三〇箱二五號) 長承四年(一一三五) 実淵點、醍醐寺藏本『不空羼索神呪王經』(三七五函四一號) 仁平三年(一一五三) 覺永點、石山寺藏本『作法』(校倉聖教二六函三八號) 院政期點の四點である。覺範、覺永は何れも天台宗延曆寺の僧で、覺範には寶幢院點を加點した點本もある。¹⁰⁾

四

高山寺藏本『金剛頂一切如來真實攝大乘現證大教王經』三卷(重書一號)は、平安初期弘仁六年(八一五)六月十八日の書寫奥書があるが、全卷に白書と朱書との加點がある。その奥書は次の通りである。

(卷第一奥書) (白書) 「寛弘五年(一〇〇八)三月廿四日於仁和寺南御室點始同五日點了



この本のヲコト點は、第六圖に示した如く、星點も線點も、大部分は圓堂點に合致するが、一部分相違がある。それは第一に、壺の内部に、中央に星點「ノ」があること、そしてそれよりも少し左上に寄つた位置に星點「ト」があること、右傍（又は右邊上）に星點「ム」があることであり、第二に、圓堂點では「リ」の形の符號（ナリ・ヨリ・タリなど）が、何れも「…」の形を取つてゐることである。壺の内部に星點が多くあるこの「…」のやうな複星點を持つことは、何れも天台宗のヲコト點に一般に見られる傾向であり、これは、仁和寺がもと天台宗であつたことと關係があり、この『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』のヲコト點は、圓堂點の初期の、不安定な段階の形を示してをり、圓堂點自体が天台宗のヲコト點の性格を繼承してゐたことを示唆するのではなからうか。

かやうに考へると、水尾點についても、「カミナツキ」云々の符號を持つことは、中田博士説のやうに、それが第一群點で天台宗系のものとするは、却つて合理性を含んだ推論と見ることも出来るのではないか。

但し、中田説の、玄静（九〇四存）が使用した可能性は、時期的に見て、殆ど肯定し得ないといふべきであらう。圓堂僧正成典が水尾點を使用したといふ注記の根據は何處にあるのか。未だに見當も付かないが、或いは、「カミナツキ」云々の符號が圓堂點と似てゐることから、誤つて附加されたと見ることが出来るかも知れない。

水尾點が圓堂點よりも古いとする曾田説については、その可能性は否定出来ないが、確實な新資料が発見されない限り、何とも言へない。しかし、水尾點が「…」のやうな複星點を持たないこと、圓堂點以外には見えない「リ」の符號があること、そして、「リ」の符號は、前述のやうに、圓堂點の初期には「…」であり、それから變形したものらしいこ

などを考へると、愚見としては、寧ろ圓堂點が先で、水尾點はその後で出現したか、又は、後の時点で圓堂點によつて追加乃至は變形されたと見ることが出来るのではあるまいか。

序ながら、圓堂點の壺の内部の星點「卜」が消滅したことに關して、真言宗系統のヲコト點では、一般に壺の内部に星點を有しないものがあることについて、一二付言して置きたい。

その一は、淨光房點の歴史的變形である。その夙い頃の文獻では、壺の中央に星點「ノ」があつたが、やがてそれは右邊中央に移動して、壺の内部の星點は消滅した。⁽¹²⁾又、中院僧正點は、最初から壺の内部の星點は設定されてゐない。實際の中院僧正點では、中央の星點は抹消の符號に使用されてゐる。中院僧正點では、星點のみならず、線點も、壺の内部には殆ど使用されてゐない。その理由は明でないが、強ひて考へるならば、墨點の加點には、字畫と重なり難いので利點はあるが、真言宗系のヲコト點には墨點のヲコト點は寧ろ稀であるから、この推測もあまり説得性は無い。尚、考ふべき問題であらう。

尚、天台宗系のヲコト點では、壺の内部に星點を持つものが多く、それから派生したと見られる俗家點(儒家點)でも、最初の内は、東洋文庫藏本の『古文尚書』や『毛詩』の古點(共に九世紀初頭)では、壺の内部に多くの星點を持つてゐたが、やがてそれらは殆ど消滅して、中央の「ノ」を残すのみとなつた。このことも、何か關係があるかと思はれるので、参考のために述べておく次第である。

注

- (1) 吉澤義則「尚書及び日本書紀古鈔本に加へられたる平古止點に就きて」(大正七年八月、『國語國文の研究』所収)。
- (2) 中田祝夫『古點本の國語學的研究 總論篇』二九九頁。(昭和二十九年五月)

- (3) 中田祝夫『古點本の國語學的研究 總論篇』三〇〇頁。
- (4) 曾田文雄「點圖の有機的性格——圓堂點を中心に——」(『國語國文』第二十九卷第二號、昭和三十五年二月)
- (5) 築島裕『平安時代訓點本論考 研究篇』三四五頁。(平成八年五月)
- (6) 築島裕『平安時代訓點本論考 ラコト點圖 假名字体表』四八頁。但し、記載の一部に不備な點があるので、本稿で訂正する。
- (7) 月本雅幸氏の教示によれば、宮内庁書陵部藏本の『文鏡秘府論』六帖は、もと高山寺の藏本であつたが、その中には、圓堂點の他に、第五群點が加點されてゐる。この兩種のラコト點の關係は、未だ明でないが、顯證本點圖集の「經傳」は第五群點であり、顯證は高山寺の本を見てゐた可能性があるから、この事實は、何か繋りがあるのかも知れない。
- (8) 『仁和寺諸院家記』(惠山書寫本)(『仁和寺資料第一』三一—頁。
- (9) 曾田文雄高野山光明院所藏『蘇悉地揭羅經のラコト點』(『訓點語と訓點資料』第一輯、昭和二十九年十二月)。
- (10) 築島裕『平安時代訓點本論考 研究篇』六九四頁。
- (11) 中田祝夫『古點本の國語學的研究 總論篇』三八七頁。
- (12) 築島裕『平安時代訓點本論考 研究篇』八三九頁。